

祈禱書の反乱と国民契約の地方史

富田理恵

1 はじめに 体制転換の地方史

21世紀初頭に生きる私たちは、1989年の東欧の体制転換から2011年のアラブの春に至るまで、体制転換という現象を目撃してきた。すなわち、弾圧され続けた少数の反体制派の勢力が急速に勢いを増し、ついには権力者を追い詰めてその座を明け渡させ、独裁体制が一挙に崩壊するといった事件である。ところで体制派と反体制派が逆転するような政治的な激変は、多くの場合首都における大衆動員も含めた抗争で決着がつけられたように見える。では首都以外で何が起きていたのだろうかという疑問が沸く。独裁体制の地方統治は、そのシステムが独裁者の国民監視システムと一体となっており、地方統治の任に当たるものは、権力者に信服していたからであれ、黙従していたからであれ、いわば体制側の手先であったからこそ存在を許されていた。その彼らが首都で体制転換が起きたからといって、昨日まで忠誠を誓っていた体制の崩壊を受け入れられるのだろうか。首都の体制転換によって新体制が確立したにもかかわらず、地方において平和的に事態が推移したとなれば、むしろ地方統治の任に当たるものの中からすでに体制変革の運動が起こっており、目に見える体制転換の事件以前に、旧体制は内部から空洞化していたといえるであろう。もしこのような事実がなければ、民衆に近い場所にいる地方統治者は、体制転換の直後に旧体制の手先として、人々の指弾を浴びたはずだからである。したがって、体制転換の前後で地方統治の場に何が起きていたのかに注目することで、体制転換の性格をより重層的に考察できるといえるだろう。

これは、17世紀スコットランドの体制転換を見る上でも重要な着眼点と考えられる。スコットランドでは、1637年7月23日より祈禱書に対する反対運動が公然と行われるようになり、反対派の結束と祈禱書反対の意思表明の目的で1638年2月末に国民契約が採択された。チャールズはこの運動の武力弾圧を試み契約を奉ずる側（契約派）も武装して抵抗したので、二回に及ぶ主教戦争となった。第二次主教戦争のさなかの1640年6月2日に、契約派は議会を開会し、国制の改革を含む

立法を成立させた。その後契約派は主教戦争に勝利し、1641年8月には国王チャールズがスコットランドに到来して1640年6月議会の立法を承認した。今回の調査では、1637年7月23日から1640年6月2日までをスコットランドの体制転換の過程と捉えて、一定の地域に焦点を当て当該時期の公式史料の記述に注目した。本稿では、その前半部分の1637年から国民契約を経た38年6月末までを扱う。体制転換の様相をテーマとし地方統治を担う層の体制からの離反の有無を見るため、また体制転換前後の統治の変化をみるため、私的な日記や運動のパンフレットではなく、市参事会史料、教会史料という地方の公文書を検討の対象とした。契約派が活躍した時代（1637-51年）の地方史研究は、2011年現在ではエディンバラに焦点を当てたローラ・ステュワートの研究⁽¹⁾に限られ、首都以外の状況の把握が必要とされているなかで、本研究が貢献できる場所も大きいと考えられる。さて一定地域の状況を深く知るためには、詳細な記録が残る自治都市を選ばざるを得ない。今回の調査では1630年代後半において市参事会議事録とその都市を含む教会の記録の双方が残存している地域を選んだ。ただしすでに研究が行われたエディンバラと、契約派の自発的な動きがほとんど見られないとされるアバディーンを除いた。具体的には、パーンタイランド（市参事会記録、キルク・セッション記録）とパーンタイランドの属するカーコーディプレスビテリとそこに所属する教区の記録、パース（市参事会記録、キルク・セッション）とパースプレスビテリ記録、スターリング（市参事会記録とキルク・セッション記録）とスターリングプレスビテリ記録と同プレスビテリ所属の教区、モンローズ（市参事会記録とキルク・セッション記録）とその所属するブリーヒンプレスビテリ記録、さらに対応する市参事会記録が欠けているものの、ラナークプレスビテリ記録とクロースキルク・セッション記録を対象とした⁽²⁾。従来の研究では、これらの地域は契約派の運動が比較的盛んであった地域として認識されている。

さて教会組織の名称であるプレスビテリやキルク・セッションについて説明を加えておこう。一つの教区教会には、一人ないし二人の牧師がおり、10人以上の平

信徒の代表である長老が存在する。これら牧師と長老がキルク・セッションを構成し、教区教会の運営や教会訓練（戒規の執行）を行っていた。都市の教区教会であっても、一つの教区教会の管轄地域はたいてい自治都市の領域よりも広く、市壁の中のいわゆる都市部と郊外地域を含んでいた。したがって長老たちも、市参事会員と兼任しているような都市民と郊外地域の地主層（レルド、時に貴族）の双方を含んでいた。こうした教区教会を10～20管轄したのがプレスビテリで、各教区教会から38年前半までは牧師のみが集まって、一つの教区教会で処理しきれない姦通などの重大な案件や共通の課題について結論を出していたのである。

2 祈禱書への抗議

祈禱書の導入とセント・ジャイルズ教会の暴動

1636年12月20日の枢密院の布告は、こう述べた。「国王が聖職者の助言を得て、この地における神の礼拝にふさわしいと考える公的な礼拝に、聖俗の臣下は信従すべきである。すべての大主教、主教、プレスビテリ、教会人は、この公的な礼拝を適切に守り服されるよう特別の配慮をし、違反者は非難されそれにふさわしく処罰されるべきであり、特に来年の復活祭までに共同祈禱書を少なくとも2冊は入手するよう配慮すべきである」⁽³⁾。しかしこの12月の時点では共同祈禱書は出版されておらず、出版は4月末にずれ込んだ⁽⁴⁾。

祈禱書に対する抵抗の存在を意識して、6月13日枢密院は、15日以内にどの教区も2冊の祈禱書を備えさせるのが、プレスビテリの共同責任であるとした。もし従わなければ反乱の罪にあたり、逮捕され財産没収されるとした *RPCS*, 2-6, pp.448-449。祈禱書の購入ばかりでなく、実施についても進められた。エディンバラ主教は7月16日に、一週間後の23日にエディンバラ周辺の教会で祈禱書に従って礼拝が行われるべきと告知した⁽⁵⁾。

1637年7月23日、エディンバラのセント・ジャイルズ教会の礼拝で、新しい祈禱書が初めて施行された。この日の礼拝には、2人の大主教、8、9人の主教、多くの枢密院のメンバー、高等民事裁判所の判事らが、大会衆とともに集っていた。祈禱書反対の暴動が起きたのは、その礼拝中で、祈禱書が読み上げられはじめた瞬間であった。暴動の端緒を作ったのは女性たちで、主教たちを罵り、その他の者も立ち上がって椅子などを投げて外に出ていった。暴動はしかしながら、偶発的なものではなく、組織された抵抗運動の最初ののろしであった *Revolution*, p.61。この計画は3ヶ月練られて7月6日

に仕上がっていた。ファイフ地方のルーカーズの牧師、アレグザンダ・ヘンダスンと西海岸アーヴァインの牧師、ディヴィッド・ディクスンがリーダーシップを取っていた *Charles I*, p.159。

なぜ祈禱書がスコットランドで反発を呼んだのであろうか。それは、スコットランドにおいては、日曜日の礼拝が礼拝規定書に基づかねばならないという伝統がそもそもなかったことがまず挙げられる。さらに1637年の祈禱書は、イングランドのエドワード6世治世下における1549年の第一祈禱書を模したものである。この古い祈禱書はカトリック時代のミサ典書の影響を色濃く残していたのは事実で、これがカトリック的であり偶像礼拝的であるとの反発を呼んだのである⁽⁶⁾。祈禱書と同様に反発を受けたカノン書は、カンタベリー大主教ロードが策定し1636年にアバディーンで発行された教会法典で、国王の教会に対する至上権を強化し、大主教の集会のみを残しプレスビテリとキルク・セッションは廃止するなど、すでに蚕食されていたスコットランドの長老主義の伝統を全面否定するものであった⁽⁷⁾。

暴動直後から10月末までの政治状況

エディンバラの暴動を受けて、枢密院は7月29日に祈禱書の施行をいったん中止した *RPCS*, 2-6, p.490。しかし主教たちは、2冊の祈禱書を購入させる枢密院の布告を8月10日に強行する決定をした。これに対する反対請願や貴族、ジェントリ層の反対意見を受け、枢密院は8月24日、暴動の首謀者の逮捕と祈禱書の早期導入を求める王の手紙を棚上げし、かわりにスコットランドの危機的な状況を公式に宮廷に知らせ、さらなる宮廷の意向を知るまで祈禱書の強制はしないと宣言した。9月20日には王の答えが明らかにされることになった。9月20日までに三分の一の貴族、相当数のジェントリ、100名の牧師が都市、教区、プレスビテリからの68の請願を持って枢密院に提出し答えを待った。一方8月25日付の宮廷からの手紙は、礼拝規定の新機軸について広く意見を聴取するという枢密院の提案を拒否し、祈禱書の強制を即座にはっきりと行うべきと答えた。王の手紙に対する枢密院の応答は、もう一度深刻な状況を伝える手紙を書き、王に受け入れられるように書き直された二つの請願を宮廷に送るというものであった *Charles I* pp.160-163。

9月下旬に起きたもう一つの重要な事柄は、エディンバラ市参事会が26日祈禱書反対請願に同調したことである。多くの人々が押し寄せて圧力をかけた結果である。二日後都市エディンバラは、祈禱書反対の請願を提出した。エディンバラの請願を受けて、セント・アンドルー

ズ大主教ジョン・スポティズウッドは、「王の回答は10月17日までに市参事会に伝えられる」と述べた。この情報は全国に伝えられ、10月17日に各地から、貴族、レルド、そして都市や教会の代表者たちが集まって数百もの請願を枢密院に提出した。エディンバラはかつてないほど混雑するなかで、貴族、レルド（爵位のない直接受封者）、都市、牧師はそれぞれに分かれて対応を話し合った。ところが王の回答は、請願に耳を貸さず、エディンバラに不快感を示し枢密院と高等法院をリンリスゴーへ、そののちダンディーに移せというものだった。これを受けて枢密院は、枢密院の会合の解散を宣言した。すなわちこれ以上請願の受け取りも譲歩もできないということである。さらに24時間以内に群集にも解散を命じた。しかし請願者たちはただちに首都を離れはしなかった *Revolution*, p.72。翌18日エディンバラ市長とギャロウェイ主教を標的とした暴動が起き、それが収まったのち、新しい請願が起草された *Supplication*, p.370。それは次のような要旨である。

突然の解散命令に驚いた。さて主教らが作成した祈禱書は、この国の真の宗教に反し偶像礼拝と迷信の種をまいたばかりでなく、イングランドの祝福された改革者の意図を捻じ曲げ特にイングランドの祈禱書の聖餐式の部分を乱用したものである。カノン書は議会法によって確立された教会訓練を放棄し、新機軸に道を開く。高位聖職者は王の信頼をよいことに教会総会も経ず、逮捕と破門の脅しでこの2つの書物を臣下に押し付けてきた。主教たちが王を誤らせたのである。この件が正義に基づき判断されるべきで枢密院は王に正確に事実を伝えてほしい *Supplication*, pp.371-373。

祈禱書の導入中止を求める段階から、主教を批判して体制批判が強まった点が注目される。さらに、王は善き王であるが主教らが誤らせているという今後多用されていくレトリックがすでに出ている点と、イングランド宗教改革に対して一定の評価を与えながらも祈禱書を強く批判しているのが特徴である。この請願文に対する署名は、全体で482、貴族30、レルド281、市民48（36の都市の代表）で署名者の出身はローランド全体に広がっていた。枢密院は18日の段階で解散期限を新たに24時間以内としたものの、請願の受け取りはそれが禁じられているからという理由で、しなかった。請願者たちは地元で署名を集める意図で18日の請願の写しを持ちかえり、11月15日の再会を約した *Revolution*, p.73。

パース

今回の調査対象の中で、最初に祈禱書反対の請願に関する記述が見えるのは、1637年9月13日のパースプレスビテリ記録、次いで9月18日のダイサートキルク・セッション記録、9月19日のカーコーディキルク・セッション記録である。したがって、パースののちダイサート、カーコーディと両教区が属するカーコーディプレスビテリに注目する。

パースプレスビテリは、20の教区からなりCH2/449/1/1、1637年2月CH2/299/1と1638年3月CH2/299/1/368の記事から確認できる当時の議長はパース、セント・ジョンストン教会のジョン・ロバートスンである。祈禱書に関する最初の言及である9月13日の記事は、「牧師たちは、次回の枢密院の日に祈禱書反対の請願をする。請願書の書き手はジョン・ロバートスンとロバート・マリである」CH2/299/1/366との記述である。その後10月25日に請願内容が読まれ、ロバートスンを初めとする16名の牧師が署名したCH2/299/1/366。さらに、パースをはじめとする7つの教区に請願が回され教区民の署名が集められた。11月8日時点でこの請願書と署名簿はロバートスンの手元にあり、枢密院に提出される予定となっていたCH2/299/1/366-367。提出されたパースプレスビテリの請願を、枢密院史料で見つけることができる *RPCS*, 2-6, p.715。要旨は「祈禱書は、聖書と議会、教会総会で認められた信仰告白に多くの点で違背し、法王教のミサに似通ってきた。神の言葉が認める以上に私たちに押し付けしないでください」とする比較的簡略な内容である。

一方パース市参事会は、参事会記録にないものの10月18日の請願に都市代表三名が署名している *Supplication*, p.374。参事会記録から確認できる動きの最初は、11月7日である。都市代表としてギルド長のトマス・ダラムがエディンバラに送られることになった記事である。目的は、11月13日に開催される「都市の集会」出席である。そこでは、「祈禱書、カノン書、教会の基本法と現在の教会統治についての請願の署名について」論議されることになっていた *Perth and Kinross Council Archive*, B59/16/2/131-132A⁽⁸⁾。

以上から次のことが言えるだろう。パースをめぐる動きの主導権を握ったのは、プレスビテリのジョン・ロバートスン（当該教区在職1624-49年）とメスヴェン教区の牧師ロバート・マリ（在職1615-1648）⁽⁹⁾と推測される。ロバートスンは、同じプレスビテリのフォーガンデニ教区のウィリアム・ローとともに王によって1634年9月18日にパースシャの治安判事に任命されている

RPCS, 2-5, pp.384-385。こうした経歴にもかかわらず、ロバートソンは、マリとともに、1638年以降目覚ましい活躍をみせる。1638年のグラスゴー教会総会でロバートソンは、ジェイムズ治世の教会総会を精査し欠陥のある総会を無効とする委員会の長を務めた⁽¹⁰⁾。1639年4月のパース・スターリングシノッドでは、開会説教を務めたCH2/449/1/1。マリはといえば、38年の教会総会において、教会記録を精査する委員会のメンバーとなった *Letters*, Vol.1, p.130。さらに治安判事であったウィリアム・ローも、フォーガンデニの牧師として10月18日の反対請願にマリとともに参加している⁽¹¹⁾。以上から、パース周辺の祈禱書反対運動は、ロバートソン、マリ、ローの三名がプレズビテリで祈禱書の不当性を訴えたのが出発点であったと考えられる。

カーコーディプレズビテリとその教区

パースの次に早い記録が、9月18日、カーコーディプレズビテリに属するダイサートのキルク・セッション記録である。「同日招集されたセッションは、主任牧師と牧師が教会の事柄に関して、枢密院に請願するセッションの代表に指名した」CH2/390/1/163。当時ダイサートに二人の牧師がおり、主任牧師はウィリアム・ネアン（在職1617-1653）、第二牧師はマンゴー・ロー（在職1636-不明）でともにエディンバラに行くことになった *Fasti*, Vol.2, Part 2, pp.534-535, 537。ローは、1644年にはエディンバラの牧師の一人となっている *Urban Politics*, p.90。都市ダイサートも10月18日に祈禱書反対の請願を出しており *Petition*, p.246、ダイサートでは市当局と教会が協調して祈禱書に反対した。同じプレズビテリの中の教区、カーコーディキルク・セッションが次に続く。「庶民に動揺や反乱がおきるから」という理由づけで、祈禱書反対の請願を起草すべきとし、郊外地域の代表として貴族とレルドと、ウィリアム・ウィリアムソンと二人のベイリ（助役）が都市部の代表として向かうことになったCH2/636/34/361。カーコーディにも二人の牧師がおり、第一牧師はジェイムズ・シムソン（在職1627-65） *Fasti*, Vol.2, Part 2, pp.514-515、第二牧師はロバート・ダグラスであったCH2/224/1/242。ダグラスは、1638年6月に国王代理ハミルトンがダルキースに来た時、その前で主教制排撃の説教をおこなった *Letters*, Vol.1, p.86。同年の教会総会で立法準備の委員会のメンバーとなり *Letters*, Vol.1, p.137、39年にはエディンバラの牧師の一人となって転出した *Urban Politics*, p.82。

こうしたメンバーを含むカーコーディプレズビテリは、14教区を包摂しCH2/224/1/279-280、カーコーディ

とダイサートの二か所で交互に集まりが持たれていた。議長については、1636年9月3日に行われたウィムズ教区への教会巡察の記事CH2/224/1/191から議長がバーンタイランドの牧師ジョン・マイケルソンであると同定できる。しかし37年年初から議長の出席は減り始め、37年5月18日を最後にCH2/224/1/208あとは1、2回の出席しかない。夏にかけて出席者はカーコーディの牧師、ダイサートの牧師、スクーニーとレズリの牧師が中心となっていく。祈禱書反対の請願を決定する直前のプレズビテリの出席者は「カーコーディ、ダイサート、レズリ、オクターツール、スクーニーの牧師」と記されているCH2/224/1/219。この事実は示唆的である。後述する枢密院史料にレズリ教区とスクーニー教区の請願が残されているからである *RPCS*, 2-6, p.706。すなわちマイケルソンの不在中に、祈禱書反対派がプレズビテリの主導権を掌握したことが推定される。

枢密院の会合が一旦閉じ群衆が解散させられ再び署名活動が始まった時期の10月19日、カーコーディプレズビテリ記録は、「牧師たちは祈禱書反対の請願に満足し喜んで署名した」と残したCH2/224/1/220。この請願の内容は当日でなく、1638年1月18日付で記録されているCH2/224/1/224。これは前述した10月18日の反対請願と同内容である。

スターリング

9月19日のカーコーディキルク・セッション記録に続くのが、9月25日のスターリング市参事会議事録である。「この共同体のために、この市の市長、ベイリと参事会の名において」以下を内容とする請願を認めた、との内容である。「1636年12月20日に祈禱書が王国の唯一の礼拝の形に決められた。これには議会法や教会総会の法の承認もない。さらに私たちが享受してきた宗教改革からの危険な逸脱である。牧師は逮捕の脅しのもとで祈禱書とカノン書を買うことになり、礼拝の実施が近付いてきた。危険な宗教の新機軸に従うか、非難と処罰に従うかということになった。こうした困難を枢密院が王に伝えてください。またこれ以上新機軸の恐怖から救い、神と王に喜んで仕えることができるようお願いする」⁽¹²⁾がその要旨である。従わない牧師の「処罰」を問うている点に、行政責任者の請願らしさが見える。内容は、都市エアのものとはほぼ同じである *RPCS*, 2-6, p.700。続いてスターリング市参事会は、10月13日の記事として、市長ら三人の都市当局者を都市代表として枢密院への請願を決定したと記す *Stirling Extracts*, p.178。請願の事実は枢密院史料でも確認できた *RPCS*, 2-6, p.701。

スターリングプレズビテリは、10の教区からなり

Stirling Council Archives Service, CH2/722/5/338-339、37年9月8日における議長はジェイムズ・エドモントンで、セント・ニニアン教区の牧師である。彼はガーガンノック教区の牧師ウィリアム・ジャスティス、ダニペース教区の牧師アレグザンダ・ノリとともに1634年9月18日に王から治安判事に任命されている *RPCS*, 2-5, p.382。スターリングプレスビテリの動きは見えずらい。プレスビテリの公式記録と外部からの情報が食い違うからである。公式のプレスビテリ記録には9月8日、エディンバラ主教の手紙が読み上げられている。「エア出身の15人のトルコ人に捕まった哀れな人々を救うために募金をするように」という内容で、プレスビテリは賛同している Stirling Council Archives Service, CH2/722/5/288。祈禱書反対の記事は全く見られない。しかし10月18日の請願には、スターリングプレスビテリの議長エドモントンら6名が署名している *Supplication*, p.375。確かにこれは牧師個人の判断によるともいえるだろう。しかし次に紹介するのは、プレスビテリの名による事柄である。枢密院史料は、スターリングプレスビテリの請願を掲載しているのである *RPCS*, 2-6, p.715-716。その要旨は、「私たちは、祈禱書を信仰と良心の故に導入することができない。宗教改革以来の私たちの教会からは排除されてきたものであり、ローマの教会に近づけるものだからである。さらに祈禱書の導入によって、牧師から民心が離れ牧師が苦境に陥ることになる。したがって私たちの苦情に心にとめて、恐るべき新機軸から逃れることができるよう、王との間をとりなしてほしい」という内容である。日付は不明でエドモントン以下、9名の牧師の署名がある。同プレスビテリで署名しなかったのは、上記の治安判事3人の一人、アレグザンダ・ノリである。枢密院に反対請願をした牧師たちが、その行動をプレスビテリ記録に残さなかったのは、慎重さの故であろうか。

クーロス

9月25日のスターリング市参事会に続くのが、10月1日のクーロススキルク・セッションである。フォース湾の北岸にあるクーロスは、この時点でダンブレインプレスビテリに属しジョン・ダンカンを牧師としていた⁽¹³⁾。同日の記録は「私たちは迷信と法王教に満ちている祈禱書に恐れを持っており、すでにトラブルが起こっている。それゆえ教区教会の名で祈禱書反対の請願を行うことに同意した」CH2/77/1/56と述べる。さらに10月14日には、翌週の枢密院の会合にあわせて、教区の代表として三人の郊外地域のレルドが請願に行くことになったCH2/77/1/56。1637年5月7日の長老リス

トCH2/77/1/55から、3人とも当該教区の長老とわかる。10月22日には、請願の報告が記されている。「牧師と代表者によって以下の報告がなされた」「枢密院への一般的な嘆願が作られ、代表はそれに署名した。枢密院に提出された請願の写しがセッションに提出され、メンバーは全員署名した」とある。10月18日の請願には、牧師ダンカンの署名、都市クーロスの代表の署名がある *Supplication*, pp.375,374。またクーロススキルク・セッションが祈禱書反対の請願を行った点については、枢密院史料の裏付けがある *RPCS*, 2-6, pp.702-703。

当該時期のクーロス市参事会記録は現存しない。ただしクーロス市参事会が、スコットランドの諸都市の中でも先頭を切って祈禱書反対に動いていたことを示唆する別史料があるB9/12/7/13(後述)。1631年のクーロス着任時牧師ダンカンは、ダンブレイン主教の強い推挙を受けていた *Culross and Tulliallan*, Vol.1, p.172。クーロスでは郊外地域のレルドと市参事会が祈禱書反対の流れを作ると、ダンカンは着任の経緯にもかかわらず10月14日の後にエディンバラ行きを決意し、署名行動を共にしたと考えられる。

枢密院史料のなかの祈禱書反対請願

今までにも言及してきたように、1637年の秋に各地からの枢密院への祈禱書反対請願の一部は、枢密院史料に収められて、印刷史料となっている *RPCS*, 2-6, pp.700-16。請願主体の明確な請願は46あり、そのうち6が市参事会を主体とする請願で、都市名を挙げるとエア、クーバー、ダンバートン、アーヴァイン、ラナーク、スターリング、35が教区(牧師や長老、教区地主、教区民などが主体)、5がプレスビテリ(クーバー、ハディントン、キルクブリ、パース、スターリング)となっている。35の請願が西部とファイフからである *Charles I* p.162。本論に関係の深い教区をあげてみよう。すでにクーロスの掲載に言及した。カーコーディプレスビテリに属するケノウェイ(牧師フレデリック・カーマイケル)、キングラシ(牧師トマス・メルヴィル)、レズリ(牧師ジョン・スミス)、スクーニー(牧師ロバート・克蘭ストン)は、すべて「教区の牧師と長老の名において」請願を行っている(牧師名は *Fasti*, Vol.2, Part 2, pp.540,545,549-550, 558)。これらに加え、それぞれ二人の牧師をもつダイサートとカーコーディ教区教会も請願しており、10月18日の請願には、ポートモックの牧師、ヘンリー・ヴィルキも署名しているので *Supplication*, pp.376、カーコーディプレスビテリでは1637年秋の段階で祈禱書反対のために積極的に行動した牧師は半数以上におよんだ(16人の牧師のうち9人)ことがわかる。請願を行った牧師たちは、教会総

会への代表に選出されたり教区を移動したりして、今後活躍の場を広げていくことになった。

1637年11月中旬の請願運動

10月の場合には、10月17日までに王の返答があるとの情報が流れたので、人々が首都に請願に来た。しかし10月18日の請願者たちが11月15日に集まろうと約束したのは、その期日までに王の回答を得る見通しがあったからではない。請願の指導層が、この日を設定して人々を首都に呼び自らの組織化を行おうとしたのである。10月18日に暴動に襲われたエディンバラ市長とギャロウェイ主教は、「少しの人数で交渉してほしい」といった。その言葉を捕らえて請願指導層は、請願者たちの代表を選挙するために11月15日に集合させたのである *Revolution*, p.75。請願者たちは貴族、バロン、市民、牧師に分かれた。貴族層はもともと数に限りがあり、請願者の中で貴族身分に属するものは、第一のテーブルを構成した。さらに貴族は互選でエディンバラに残るメンバーとして4名を決定した。バロンは、出身の州ごとに分かれ、各州2名の代表者をまず決定した。この州の代表者たちのグループは、第二のテーブルと呼ばれるようになる。ここで選ばれたメンバーからさらに3名が選ばれてエディンバラに残った。都市も各都市から一名の代表者を決めた。この都市代表たちは第三のテーブルと呼ばれ、そこから3名の都市代表が選ばれた。バーンタイランド市参事会記録からそれが、スターリング、クーバー、クーロスであったことがわかる B9/12/7/13A-13。牧師は、各プレスビテリから一名選ばれ彼らは第四のテーブルと呼ばれた。そのうちから3名の牧師が選ばれ首都に残った。首都滞在の13名は同じ身分の中でメンバー交代しながらも、他の身分と一緒に会する委員会を構成し11月16日に活動を始めた。王からの回答が来たら枢密院はこの委員会に連絡し、委員会はその出身身分からさらに地域社会へと情報を伝えることになった *Charles I*, pp. 166-168。

今まで述べてきたように11月中旬に各地の請願者たちがふたたび首都に集まり運動の組織化を進めた。各地の記録を見てみよう。

バーンタイランド市参事会は、すでに10月18日の請願に参加している Petition, p.426。しかし市参事記録における請願活動への言及は、11月7日が最初である。当日の記録は「都市の総会が11月13日に開会するので代表を送る。目的は枢密院にイングランドから持ち込まれた祈禱書とカノン書の義務から、都市を解放するよう請願するためである」と述べる B9/12/7/10。代表はジョージ・ガーディンとウィリアム・メイクルスの二

名であった。都市の総会とは、祈禱書反対の都市の集会、すなわち第三テーブルの集会と解釈できよう。祈禱書とカノン書を「イングランドからの」と形容している点が注目される。

モントローズ市参事会も、すでに10月18日の請願に参加している Petition, p.426 が、市参事記録における請願活動の言及は、11月10日が最初である。当日の記録は「エディンバラに代表を送る決定をした。11月13日に他の都市との会合に参加するためである」とした。明らかにバーンタイランドが言及するのと同じ集会への出席予定であるのだが、目的を明記せず慎重な書き方にとどめた Angus Archive, M1/1/160。ダイサートキルク・セッションは、11月13日に主任牧師ウィリアム・ネアンを教会の代表としてエディンバラに送る決定をしている CH2/390/1/164。パースプレスビテリも、「牧師がエディンバラにいるので会合はない」CH2/299/1/367としている。すなわち牧師たちはエディンバラに行っていた。

11月21日のバーンタイランド市参事会記録は、「都市の総会」の報告を行った。それによれば総会は、クーパー、スターリング、クーロスの都市代表を枢密院からの請願の答えを聞くため、エディンバラに残したのであった B9/12/7/13A-13。この三都市は重要な任務を託された。祈禱書反対の大義に深くコミットしていると目された可能性が高い。本研究で初めて、請願を支持する都市が他の身分も集まる予定の11月15日に先駆けて、13日に総会を持っていたことが明らかになった。

1637年12月の請願運動

11月末にエディンバラにとどまっている委員会から、ロクスバラ伯が国王の指令を携えて12月7日のリンリスゴーでの枢密院に加わるという情報が流された。各州、各都市、各プレスビテリで代表の選出が行われ、選出された人々は12月7日までにエディンバラに到着していた。枢密院は請願者に会うと約束した。

さて王の手紙は、暴動にたいそう腹を立てたので請願者に応えるのを遅らせること、(事態の悪化を憂慮して欠席しがちであった主教たちも含め) 枢密院のメンバーはすべて出席すること、法王教の迷信を嫌悪していることを述べた。

一方請願指導層のうちの貴族は、州から2人選ばれていたレルド、自治都市各一名の代表、各プレスビテリからの一名の牧師の計140名に及ぶ全体で会うのではなく、4人の貴族は各身分の代表4名ずつと会い、そこでの決定や忠告を出身母体に連絡する方式で運動を進めた。12月21日からロードンら請願指導層と枢密院の話し

合いがなされ、請願指導層は請願が審議される場に主教が参加することに反対した。彼らは当事者だからというのがその理由である。結論として、事が重大なので王に知らせ返事を待つことになった。首都に集まった代表者たちは解散することに同意し、さらに事の経緯を正確に記録する文書作成が指導層によって行われることになった *Revolution*, pp.76-79。またこの時から請願指導層は、枢密院のメンバーや国家官吏の動きを追跡するようになった Charles I, p.170。

さて、今回調査した史料は、11月末から12月に何を語っているだろうか。パースプレスビテリは11月29日に「カノン書と祈禱書への反対請願への王の回答を知るため」ロバート・マリの派遣を決めた CH2/299/1/367。スターリング市参事会は12月1日に市長であるウェルトンのトマス・ブルースを代表に選んだ *Stirling Extract*, pp.178-179。パース市参事会は12月4日にギルド長トマス・ダラムに代表を委任する記事を書いた。スターリングの記事を前半共有しながらパースは代表選任の記事を書いている。ひな形となる文章が回っていたと推定される。目的は「他の都市と話し合うため、王の答えを聞くため」Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/132であった。12月5日のバーンタイランド市参事会は「祈禱書とカノン書の件が継続中であること」に関してベイリ、ウィリアム・メイクルスをエディンバラに送る決定を行った B9/12/7/15。カーコーディプレスビテリ記録は、代表選任を正面から述べた記事はなく、12月7日の中の一節として「プレスビテリの代表として海を渡ってリンリスゴーに行ったロバート・ダグラスの代わりに」との記述が見える CH2/224/1/221。

ジョージ・ギレスピの審査

カーコーディプレスビテリは、チャールズ治世ではじめて1638年の4月に主教の介在なく牧師を叙任した最初のプレスビテリである⁽¹⁴⁾。しかもその牧師は、1640年代契約派の指導的な牧師として活躍するジョージ・ギレスピであった。ただし1638年1月段階から伏線が敷かれてあって、はじめて実現に至った。その伏線をここで追跡しておこう。

まずジョージ・ギレスピとはどのような人物であったのだろうか。

彼はカーコーディの牧師を父として1613年に生まれた。セント・アンドルーズ大学に進学し29年から31年までカーコーディプレスビテリの神学奨学生となっていた。弱冠24歳の彼は37年夏『イングランドの法王教的な儀式への反駁』(*A Dispute Against English Popish*

Ceremonies)をネーデルランドで匿名にて出版した。宗教上の新機軸を痛烈に批判する内容であって、枢密院は10月その書物を集めて焚書すべきと命令を下した。

その後どのような活躍をするのか見ていこう。彼は38年の教会総会に説教者として招かれ第二次主教戦争の従軍牧師となった。43年にはスコットランドからウェストミンスター神学会議に4人の著名な神学者が代表として派遣されたが、ギレスピはその一人であった。47年にはセント・ジャイルズ教会の牧師、48年には教会総会議長となるが同年死去した⁽¹⁵⁾。

さて時計の針を1638年1月5日の時点に戻そう。この日以前にウィムズ教区の牧師パトリック・マーンズは亡くなっていた。ギレスピのような急進的な思想の持ち主が牧師職を得た背景には、この教区の聖職禄推挙権保持者がエディンバラ市参事会であったこと、この首都の市参事会は9月26日に請願者側に身を置くことを決定していたことが挙げられる。1月5日エディンバラ市参事会は彼をウィムズの教会の牧師に推挙した⁽¹⁶⁾。

この推挙を受けて1月11日以前にセント・アンドルーズ大主教ジョン・スポティズウッドは、カーコーディプレスビテリの議長であるバーンタイランドの牧師、ジョン・マイケルスンに手紙を書いた。「プレスビテリの牧師たちの知識と協力なしに牧師の審査を大主教が行うことはしないので、ウィムズの教会のためにジョージ・ギレスピを審査するように、聖書箇所を決めて来週の木曜日カーコーディで教えるよう指定するように」と指示した。しかし議長は出席せず(彼の欠席は恒常的となっていた)、代わりにプレスビテリに手紙を書いた。1月11日のカーコーディプレスビテリは、議長の手紙を踏まえ聖書箇所を指定した CH2/224/1/223。翌週にあたる1月18日の記事は次のように言う「彼 [=ギレスピ] は、牧師たちに十分な満足を与えたので、喜んで牧師たちはその証明としてギレスピへの是認を出し、書記をして議長に書き送らしめる」CH2/224/1/223と。2月15日時点では既にギレスピがプレスビテリに参加して活動していたことをうかがわせる CH2/224/1/226。

1638年2月中旬から下旬の請願運動

エディンバラの枢密院の代表としてトラクエア伯が一月後半にロンドン宮廷に召喚された。ロンドンを出発した2月9日、国王こそが祈禱書作成の責を負っていると言明し、かつ請願者たちは集会を閉じ地元に戻ることもなければ反逆罪とみなす旨の布告を携えてきた。帰国したトラクエアは、請願者たちの抗議声明に直面しないようスターリングで抜き打ちに布告を出す予定だったが情報が漏れ、彼は19日の午前2時に布告を出したも

の、その場で請願者たちの抗議声明を聞かされた。解散しないと反逆罪とみなすとの布告に、請願者たちは王への反発を強め、布告にあえて従わず首都は2000人の請願者で膨れ上がった。請願指導層がさらに人を集めたからである。23日以降画期をなす出来事が起きていった。まず請願者側は、今までの4つのテーブルにくわえ、第五のテーブルを形成した。これは、貴族身分の請願者に第二、第三、第四テーブルのそれぞれから4人ずつの代表が加わったもので、第五のテーブルが運動の中核を担う組織体となった。この5日後に作成された国民契約は、第五テーブルから委任されたものである。すなわち請願者たちは2月末の段階で、リーダーシップの主体を明確にし、その団結の証、国民契約を形にした。国民契約は、1581年の否定信条を掲載している。したがって史料では、契約に署名したり誓約したりすることを「更新」(renewal)という言葉で表していることが多い。16世紀において否定したカトリック的残滓を、再度否定する契約を結ぶという意味合いである。しかし国民契約の本質は、A・マキネスによれば、「神のもとにおける主権者である人々の独立を主張するナショナリストの宣言文である」といわれるように、革命的な性格をもつ文書であった。これ以降請願者たちは契約派と呼ばれる。いっぽう、トラクエアは契約派の側に身を置き、枢密院は有名無実化した。第五テーブルは、2月末を起点にスコットランドの実質的な統治権を掌握していったのである *Revolution*, pp. 79-84; *Chales I*, pp.171-173。

各地の記録ではこの時期に何が書かれていたであろうか。

パース市参事会は、2月12日「祈禱書とカノン書、高等宗務裁判所についての王の意志を知るため」Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/133 代表を派遣した。バーンタイランド市参事会は2月末日の記事としてジョージ・ガーディンを派遣し、目的は「他の都市との会合のため」としている B9/12/7/23。モントローズ市参事会は、「私たちの請願に対する王の回答を知るため、他の都市代表と会合するため」2月23日に派遣を決定している Angus Archive, M1/1/165-166。パース市参事会は2月25日に再度3人の代表の派遣を決定している Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/133。

都市代表は、第三のテーブルに代表を送りそこで足並みをそろえることにより、契約派の運動に発言しながら参加していったことが、各地の参事会記録からわかる。

ラナークプレスビテリ

二月末国民契約作成に向けて祈禱書反対の請願運動が

盛り上がる中、ラナークプレスビテリはこの時期に初めて、代表を首都に送って運動に参加した。どのような葛藤がプレスビテリ内部であったのか、プレスビテリ記録が経緯を詳しく語っている。1637年8月時点でラナークプレスビテリの議長はカーステアーズ教会の牧師ジョン・リンジで12の教区を包摂していた *Fasti*, Vol.2, Part 2, pp.307-355。

1637年8月3日の記録は、この日以前にグラスゴー大主教が祈禱書を各教会が二冊ずつ買うよう命じる手紙をよこしたことを記している。8月3日牧師たちは翌日に結論を出し、議長はこれを大主教に伝えると約束した。その下の2行は、ジョン・パタスンが「私的に議論を操り」祈禱書を買うことになったことを記している CH2/234/1/114。

ここから記録が途切れ半ページほどの空白の後、1638年2月8日の記録となっている CH2/234/1/116-117。要旨は次のとおりである。

教会の命令や助言なしに主教によって押しつけられた新しい祈禱書とカノン書は、逮捕を脅しに枢密院の命令によって牧師たちに押し付けられようとして、大きな混乱が起こってきた。この時にグラスゴー大主教も、望まないプレスビテリの牧師たちに、命令書とともに使いの者をよこして、逮捕の脅しで祈禱書を買わせようとした。

全国的には反対請願が始まり、あらゆる人々特に各地からの代表が、エディンバラに集まり祈禱書に反駁した。ラナークプレスビテリはこの点で劣っていた。反対の動きがなかったのは、議長のジョン・リンジの妨害による。そもそもこのプレスビテリは主教のせいで分裂していた。牧師たちはトマス・キャンブルを選んだのに、主教がリンジを押しつけてきて、そのためプレスビテリはほとんど開かれなかった。しかしことが重大になって放置できない状況となった。

同僚の牧師は請願に署名するよう議長のリンジを説得した。これに応じなかったので、彼が議長を退き私たちにエディンバラに送る代表を選ばせてくれと言ったが、リンジは拒絶した。そこで牧師たちは彼を入れずに議長を選任し、もう彼を議長として認めないと言った。すると驚いたことに突然リンジはプレスビテリを閉会させ、退席した。ロバート・ハミルトンとロバート・ネアンがそれに従った。

リンジが議長に入り込んできた経緯を踏まえ、牧師たちは議長の自由な選挙の必要を感じこれを行った。かつて議長に選出されたトマス・キャンブルに議長就

任を打診したが、断られたので、ここはアレグザンダ・サマヴィルが議長をすることになった。このような経緯の後牧師たちは、他のプレスビテリの例に倣いウィリアム・リヴィングストンとサマヴィルを代表として選んで、エディンバラに送り、事態の進展に備えることにした。

1638年2月8日の説明を踏まえると、主教批判のニュアンスが込められている1637年の8月3日の最後の2行は、ラナークプレスビテリの中の祈禱書反対派が当該プレスビテリの主導権を握ってのち、書き加えられたものと推定される。またこの箇所が登場するジョン・パタスは、2月8日の記事より大主教の使者と考えられる。

主教の地位が安泰に見えた1637年夏の状況から、祈禱書反対派が地歩を固めていく秋から冬、おそらくスコットランド各地で繰り広げられた権力闘争の一幕が2月8日の記事に活写されているといえよう。登場人物を追ってみよう。主教がラナークプレスビテリに議長として押し付けてきたというカーステアーズ教区のジョン・リンジは、高等宗務裁判所のメンバーであった *Fasti*, Vol.2, Part 2, pp.317-318。彼とともに席を立ったレスマハゴアの牧師ロバート・ハミルトンは1634年枢密院によってラナーク州の治安判事に任命されていた *RPCS*, 2-5, p.380。一方ラナークの牧師で、プレスビテリ代表の一人に選任されたウィリアム・リヴィングストンは、パースの五箇条に信従しなかった件で、高等宗務裁判所によって、いったん解職されている *Fasti*, Vol.2, Part 2, p.307。チャールズ親政期のラナークプレスビテリは、思想的に正反対の牧師を含んでおり、実際分裂含みで事態は推移していた。このような状況下で、2月8日の記事は、祈禱書反対の立場からプレスビテリとしてまとまった請願活動ができなかった無念さを映し出しているといえよう。たしかにラナーク市参事会の側は、10月18日の請願に署名していたのである *Supplication*, p.374。

1637年から40年の間にかつての反体制派が実権を握り、権力と権威が逆転した。この体制転換の歯車は、ローランドを縦断していった。地域や教会の指導者がこの動きに賛同あるいは追従したのなら、摩擦は起きなかった。しかし根本的な宗教的政治的価値観の転換が、何の反駁も呼ばずに成立するはずもなかった。ラナークではプレスビテリ内部の権力闘争としてあらわれた葛藤が、次章に紹介するバーンタイランドでは、国民契約を拒否する牧師と、その牧師の礼拝を拒絶する教区民との対立という形で展開したのである。

3 国民契約

国民契約の成立

第五テーブルの委任を受けて、ウォリストンのジョンストンとアレグザンダ・ヘンダスンが起草した国民契約は、ロシス伯、バルメリノ卿、ロードン伯が見直し1638年2月28日までに、その他四つのテーブルの承認を受けた。28日国民契約は、エディンバラのグレイフライアーズ教会で最初に署名された。翌日エディンバラにいた各地の牧師たち、都市代表が署名した。エディンバラに集まっていた各地の代表は、地元での署名を得るために国民契約は写しを持ち帰った。しかし代表たちは、解散前に6人の貴族と数人の州代表が国民契約への王の回答を受け取るために残るように設定し、さらに今後の会合への代表を選んでおいた *Revolution*, p.84。3月8日のカーコーディプレスビテリ記録によれば、解散直前の「牧師たちの会合では、『便宜よく成されるどころでは、王国のすべての教区で契約が更新されるべき』と合意された」CH2/224/1/227のであり、3月13日のバーンタイランド市参事会記録によれば、貴族、バロン、ジェントルマン、都市は「かつてこの王国でなされた契約があらゆる都市で更新され提議され読み上げられるべきである」と結論した、と伝えている。さらにバーンタイランドを代表したジョージ・ガーディンは、バーンタイランドのベイリと市参事会に署名の可否を尋ねた。「その会合に署名の可否を報告することになっていた」のである B9/12/7/23。すなわち解散前に契約派指導層は、あらゆる地域で契約が読み上げられ更新されねばならないし、さらに参事会員や牧師などの指導的な立場の人々は、賛同を署名という形に残して、その結果が報告されるべきと決めたのである。

最初の署名の翌日にあたる3月1日、枢密院がスターリングで開催された。大法官のセント・アンドルーズ大主教、ジョン・スポティズウッドと主教たちが招集したにもかかわらず、大法官は弁明の手紙を書いて欠席し主教も一人しか来なかった。枢密院は2月19日の解散を厳命する布告が無視された以上、混乱を収拾するのに打つ手はないとして、緊迫した状況を伝えるために使者を王のもとに送ることにした *Revolution*, p.87。

カーコーディプレスビテリとその中の教区と国民契約

まずカーコーディプレスビテリとその中の教区が国民契約をどのように受け止めたか注目してみよう。3月8日のカーコーディプレスビテリは次の日曜日に「更新」の告知を行い、25日の日曜日に本番の「更新」を、断食を伴いながら行うことにした CH2/224/1/227。翌週

のプレスビテリでは、契約を更新する直前の週の18日の日曜日に契約が読まれ人々に心備えをさせておくことが決まった。また25日の契約の更新は、「特定の教区でなされるのが、好都合である」とした。すなわち、プレスビテリが見て更新が可能でない教区が予想され、無理な教区では強行しないと判断したのである。というのも前週のプレスビテリは、所属の牧師の全出席を求めたが実現せず、欠席の牧師の教区での強行は無理と考えたと推定されるCH2/224/1/227。カーコーディの教区教会ではプレスビテリの指令に従って、18日の日曜日に契約が読み上げられているCH2/636/34/370。

次のプレスビテリの会合が開かれた3月22日木曜日、出席の牧師たちによる契約の署名が行われ、一人を除いて全員が署名した。署名しなかった牧師は、プレスビテリの議長バーンタイランドの牧師、ジョン・マイケルスンであった。プレスビテリ記録はこのように記している。「ジョン・マイケルスン博士は同席のメンバーとともに署名するよう望まれ求められたが、きっぱりと断り自ら退き出ていった」と。なお同じく契約拒否の立場の牧師、マーキンチ教区のアンドルー・ラーマンズは、欠席していたCH2/224/1/228。彼は1635年に枢密院より任命されて治安判事の役職を得ていたことを記しておくRPCS, 2-6, p.131。

予定通り、カーコーディの教区教会を含めCH2/636/34/370、プレスビテリ管轄内のほとんどの教区が契約を誓約した。誓約しなかったのは、マーキンチ、バーンタイランド、そして牧師が空席であるウィムズの三教区であったCH2/224/1/229。なおカーコーディプレスビテリの地域では、ベイリや市参事会員、牧師などの重要な人物は契約に自ら署名することが求められていた。一方カーコーディのキルク・セッション記録は「すべての人々が先週の安息日、契約を誓約した」CH2/636/34/370とある。一般の教区民は契約に対して、個人が署名することではなく、一斉に態度で誓約の意志を示すことが求められていたようだ。これは後述するバーンタイランドの例からも明らかにされるであろう。

なおこの3月に同プレスビテリは、メンバーの票決により半年の任期という前提で新議長を選出した。3月15日に選ばれたのは、祈禱書反対請願を行っていたダイサート教区の主任牧師、ウィリアム・ネアンであったCH2/224/1/228。同プレスビテリは国民契約を機にこれを拒否する議長を退け、契約支持の立場を明確にする体制に切り替えたといえよう。

パースプレスビテリと国民契約

パースプレスビテリは3月14日の会合で次の日曜

日、すなわち18日に管轄内の教区で契約が読み上げられるべきことを決定した。その後の日曜日、すなわち25日には「書くことができる教区民はみな署名すべき」CH2/299/1/367となった。契約は断食を持って厳粛に更新されるべきとある。また次の水曜日、すなわち21日に牧師たちはパースの教会に集まって契約は、挙手とともに更新され署名したCH2/299/1/368。このプレスビテリでは、1637年10月以来、字の書ける教区民に署名の機会を与えている。契約更新の予定日、25日を終えた28日のプレスビテリに結果が報告されている。この集会に出席していた牧師の教会ではみな更新され、また間接の報告によって、更新されたことがわかる教会もあった。この結果を分析すると、20教区中契約の更新が確認されたのは14教区となっている。

このパースプレスビテリは、5月30日契約に未署名の者は当該プレスビテリの範囲内で牧師となれないと決定したCH2/299/1/369。契約賛同の有無が重要な基準と見られていく。

モントローズ市参事会と国民契約

今まで見てきた教会史料では、多くの場合神の意志を表す助動詞 shall を使って契約は更新されるべき、と書かれていた。モントローズ市参事会の3月14日の記事はこれと趣を異にする。「出席者は、すでに貴族の大部分と州と都市の代表と牧師の大部分によって署名された契約について、一致して署名することに決意した。参事会は普段より多く集っており、その面前で書記に命じて参事会員の名によって、彼らのために署名するようにさせた。」さらに市長ジョン・ガーディン以下、23名の署名を乗せている Angus Archive, M1/1/166-167。

ラナークプレスビテリと国民契約

ラナークプレスビテリでは、請願派と反請願派の間で内紛があったのをすでに見てきた。2月8日以来ラナークプレスビテリの記録を手中にしていたのは、請願派であったが、この日で内紛が終わったのではないようだ。3月15日のプレスビテリは、次のプレスビテリへの全員出席を呼びかけているが、その余白にラナーク市参事会のベイリとのいきさつを記している。なおこの参事会は10月時点より請願してきた Supplication, p.374。さてプレスビテリは、混乱時に同僚の牧師を都市ラナークで傷つける者がいた。そのようなものを処罰してほしい。黙認するのをよしとしないとベイリに求めたことに対し、彼は応諾したことが記されている。請願派から見て状況はいまだ不安定であったこと、また危機感の中請願派のプレスビテリの牧師たちは、請願派の市参事会の後援を仰いでいたことがうかがわれる CH2/234/1/117。

15日の次の記録は29日となっている。29日の記事は祈禱書反対の請願が実らず反逆罪の脅しで解散させられようとしたとの経緯を述べ、教会の中で君主や人々によって署名されてきた信仰告白を生かし、多くの侵害や腐敗を防ぐため、契約が起草されて署名や誓約のためすべての教区で提示されることとなり、それが速やかになされつつあるとの認識を示したCH2/234/1/117。さらに「この大義のため州の代表は、その領域で契約が提示されなかった教会に留意するよう勧められた。そこで同僚の牧師は、精査の結果私たちのプレスビテリで契約が読み上げられていない教会が三つあるとわかった。すなわちダグラス教区、カーマイケル教区、カーステアーズ教区である」としてこれらの教会の牧師への対応策を決めたCH2/234/1/118。前後の文脈からこれら三教区以外では、29日までにはラナークプレスビテリの範囲では契約が更新されたとみられる。

契約が読み上げられなかった三つの教区についてみていくことにしよう。ダグラス教区の牧師は、ジェイムズ・ダグラスで「最近主教によって牧師となり、我々の会合に来ていない」と記されている。彼に対してはプレスビテリの名で手紙を書き翌月曜日にラナークに来てもらい、そこでラナークの牧師ウィリアム・リヴィングストンと打ち合わせるようになった。カーマイケル教区の牧師はロバート・ネアンで、3月8日の記録によれば請願に反対するジョン・リンジとともに席を立った人物である。ネアンに対しては、ペティナン教区のウィリアム・ローリーが、ネアンが契約を告知し彼自身と人々が署名するようにさせる意図で手紙を書くことになった。彼が拒否する場合には、人を介してカーマイケルの教区民に告知してローリーの教区ペティナンに来てもらい、そこで署名ができるように指示した。カーステアーズ教区への対応は延期になったCH2/234/1/118。この教区の牧師はジョン・リンジであった*Fasti*, Vol.2, Part 2, pp.317-318。リンジから見ればこのプレスビテリは、祈禱書反対請願を主張して議長であった彼を事実上の追放に追い込んだ輩であった。プレスビテリの側も、打つ手が見つからなかったものと思われる。

ラナークプレスビテリでは、9教区で契約が読み上げられ、3教区ではそれが行われなかった。このあともラナークプレスビテリは、契約を拒否した牧師への対応に追われる。しかし契約の可否は、思想信条の問題が絡んで簡単に説得に応じて譲歩できるものでなく、対立の解消は容易ではなかったのである。

カーコーディプレスビテリにおけるジェントルマンの署名

契約が順調に署名、誓約されたならば3月中にその動きが一巡した。ところがカーコーディプレスビテリ記録では、4月も終わりにさしかかった26日において「プレスビテリは、次のように命じた。すべての牧師は15日後に、自らの教区のジェントルマンと教区地主が地域の契約 (provinciall covenant) に署名するために、このプレスビテリに彼らを連れてくるように」とあるCH2/224/1/231-232。その一週間後の5月3日にも確認の告知があるCH2/224/1/233。筆者は次のように判断している。カーコーディプレスビテリの地域では、一般の教区民には、契約への賛同を、挙手による誓約という態度表明で十分とした。一方契約派の指導層、テーブルズは、地域の有力者の署名の可否についての情報を必要としていた。というのも、カーコーディ周辺に限らず、市参事会員や牧師たちは賛同を署名という形で残しているからである。市参事会員以上に地域社会に発言権のあるジェントルマンは、署名すべき身分であった。また、教会の側も一般教区民とは異なる場で、彼らの賛同を受け入れて形に残す必要を考えていたものと推定する。もしこの筆者の推定が正しければ、カーコーディプレスビテリは地域のジェントルマンの国民契約への賛同を、牧師が彼らをプレスビテリに連れてくるということで実現しようとした点は注目に値する。

バーンタイランドと国民契約

カーコーディプレスビテリの議長でバーンタイランドの牧師、ジョン・マイケルスンは、祈禱書反対請願に署名せず、その勢力が主流となっていくプレスビテリからすでに足が遠のいていた。ただし彼が最も先鋭的に対立したのは、彼の教区民であった。マイケルスンは国民契約を拒否した。その彼を教区民が拒否し教会は無人となってしまった。その対立とそれに巻き込まれた市参事会、カーコーディプレスビテリの動きを、現存する史料群から状況を復元することができた。展開を追ってみよう。

2月11日のバーンタイランドキルク・セッションは、近隣のキングホーン教区に聖餐式に出席するなどの教区民に厳しい譴責をするため取り調べをすると告知したCH2/523/1/302。いったい、何が起きていたのであろうか。マイケルスンはパースの5カ条に従い、跪く形の聖餐式を執行していた。しかし1638年2月時点で既に国王の枢密院は、長老主義の伝統に忠実であろうとする者にとって抵抗感の強いこの条項を強制する力を失っていた。ファイフのほかの教会では、テーブルに着席する形の聖餐式に戻っていたと筆者は推定する。バーンタイランドの中で跪きたくない人々が近隣の教会に行った

のを、マイケルズンは黙認せず、その影響下にセッションは、取り調べるとの告知を出した。

しかし3月18日—この日は他の教区では契約が読み上げられた日であるが—この日に開かれたセッションでマイケルズンは長老たちの反撃にあった。マイケルズンの予定は例年のように24日土曜日に聖餐式の準備の説教を行い次の木曜日29日に聖餐式を行うというものであった。この予定に反対する者は三つの理由を挙げた。最初は全土にわたって大きな動揺があること、この日に聖餐式を行っても人々が契約を誓約する他の教会に気をとられ聖餐式に来ないこと、船乗りが海上にいて欠席することであったCH2/523/1/303。長老たちは、教区民が契約に無関心な牧師に反発して跪く聖餐式に行かないという動きがあることを察知していた。3月18日にセッション記録に記されたのは、長老側の主張であった。

一方、バーンタイランド市参事会は2月28日エディンバラで国民契約が初めて署名された際、代表を首都に送っており、3月13日参事会員は8日後までに態度決定が必要との報告がなされたB9/12/7/23。一週間後の20日に大きな動きがあった。まず参事会は契約に署名することに賛同した。同日市参事会に来たマイケルズンは、契約に署名すること、契約を教会で読み上げること、—やや解釈が難しいのであるが—人々がテーブルに着席して聖餐を受けることの三点をベイリから求められたが、これらすべてを拒否した。市参事会は次の木曜日、すなわち22日に4人の代表を指名してカーコーディプレスビテリに送りアドバイスを求めることにしたB9/12/7/24A。

カーコーディプレスビテリは市参事会と教区民が近隣のキングホーン教会にきて署名誓約することを提案したが、市参事会はこれがよい案だとは思わなかった。そこで再度マイケルズンを説得しようとし、またプレスビテリからアドバイスを得るため代表を送ったB9/12/7/25A。

3月31日の市参事会記録によれば、説教の日以外に、すなわち日曜日でない日に、誦読者であるジェイムズ・アダムスンによって契約が読み上げられることを、マイケルズンは認めた。また彼は契約の照会を求めたので、市参事会は契約の内容を彼に見せることにしたB9/12/7/25。4月3日の市参事会記録では、2日後の4月5日の木曜日にアダムスンによって教会で読み上げられ署名されることになったとしているB9/12/7/26。しかし実現されたのは、アダムスンによる読み上げだけであった。彼は、バーンタイランドの教区教会の書記を兼ねていた。彼は4月29日の記録の中に、「4月5日木曜日私アダムスン、この教会の神の言葉の誦読者は、

全会衆の前で公に羊皮紙の契約を読み上げた。牧師は私にそうする許可を与えたが、自分ではそれを聞かなかった」CH2/523/1/304と記した。

4月28日の参事会記録はプレスビテリによる「5月2日にレズリ教区の第二牧師、ジョン・スミスが説教し、契約が読み上げられ会衆が挙手をして契約を誓約することになった」との決定を記し、さらに市参事会はマイケルズンがこの事態を受け入れる方向でその友人たちから彼を説得するよう、友人のレルドに手紙を書くことにしたB9/12/7/27A。なおこのジョン・スミスはレズリ教区の名で枢密院に祈禱書反対請願をした人物であるRPCS, 2-6, p.707。5月1日の市参事会は、マイケルズンが事態を受け入れたとする友人からの報告を得たB9/12/7/27。

5月2日の誓約について、セッションの書記、アダムスは次のように記した。

5月2日水曜日レズリの牧師ジョン・スミスと多くの牧師たちが来て、公にすべての神の民の前で羊皮紙に書かれた契約を読んだ。そして第二コリント5章16-17節を説教し、契約をすべての人々に誓わせた。人々が喜びの涙で契約に加わるとき、子どもたちも立ち上がって手を上げ契約を誓ったCH2/523/1/304。

5月から6月にかけてのセッション記録は次のようになっている。5月13日、5月20日、5月27日、6月3日、6月10日、活動なし、なぜなら人々は教会から出て行ってしまい、牧師の言うことを聞こうとしなかったからであるとCH2/523/1/304。教区民のマイケルズン拒否の姿勢は断固としたもので、事実上国王の権力が無力化して意見の異なる牧師に従う必要がない自由を行使し、暗に彼らは市参事会に牧師交代を要求したのである。

以上がバーンタイランドと国民契約をめぐる出来事であった。この教区では民衆レベルから国民契約が支持されていたといえる。この教区教会の誦読者で書記のジェイムズ・アダムスは、マイケルズンの下で働いてきた。しかしその彼は、契約を支持していた。彼は自分に契約を読むという役割が与えられたことを喜び、一人称を使って「私アダムスンが読み上げた」と書いた。公式記録では珍しいことである。この書記が、他教区より一カ月以上遅れてやっと契約に加わる人々の様子を生き生きと描いて、記録に残したのである。

ギレスピの着任

カーコーディプレスビテリは、1638年の4月から5月にかけて、契約を拒否している牧師の教区民を契約に

参加させるといふ成果を挙げるほかにも、チャールズ治世で初めて主教を介在させないで牧師を叙任している。しかしこれらは、すべてプレスビテリに対する人々の働きかけに対応した動きであった。

ジョージ・ギレスピの叙任については、ウィムズ伯からの使者一名と、ウィムズ伯、ウィムズ教区の長老と教区民の代表4名がすでに牧師の資格審査に合格したギレスピの叙任を4月12日に願っているCH2/224/1/230。翌週の19日牧師ラーマンス以外の全員の賛成で、カーコーディプレスビテリが26日にギレスピを叙任しロバート・ダグラスが叙任式で説教することになったCH2/224/1/230。叙任式では教区民の同意と新議長ウィリアム・ネアンの質問とギレスピの応答、王への忠誠誓約がなされた。ギレスピは按手と祈りと詩篇の歌唱によって叙任され、長老と教区民に受け入れられたCH2/224/1/231。5月17日にはプレスビテリが叙任証書を発行しCH2/224/1/235、かつプレスビテリの牧師叙任権は神授のものであって、宗教改革以後いかなる議会法や教会総会の法によってもその権利は失われていない、と論じたCH2/224/1/236。5月31日の記録によれば、議長とマンゴー・ローはギレスピに牧師館と所属の耕地を示したCH2/224/1/236。カーコーディプレスビテリは、彼らが思い切った行動に出ていることを意識していた。そのためギレスピの牧師としての正統性が疑われぬよう論証し、牧師着任が受け入れられるよう注意を払ったのである。

1638年5月末から6月上旬にかけての契約派の運動

各地のプレスビテリや参事会が本格的にエディンバラに参集するのは、5月末を照準にした動きとなった。まず今回調査した範囲から、代表が派遣される状況をまとめてみよう。

5月16日のパースプレスビテリは、「エディンバラで来る29日開かれる会議のため」として、4人の代表を送る決定をなすと同時に2週間後(30日)の断食を決定しているCH2/299/1/369。5月25日のパース市参事会は、3人の市民を代表としてエディンバラに送る決定をした。指定される集会に出席し、祈禱書やカノン書、高等宗務裁判所や、議会法とは違背する事柄に関する嘆願に対して、王や枢密院、または国王代理から王の答えを受け取り、貴族やバロン、他の都市と話し合うため、というのが目的であったPerth and Kinross Council Archive, B59/16/2/134A。5月28日のスターリング市参事会は、市長をはじめとする三人の参事会員を市の代表としてエディンバラに派遣することを決定した。目的は「6月2日に貴族、ジェントリ、都市、牧師の集会

があるから」で、この集会の目的は、「この国の混乱を解決するために6月6日にダルキースで発表されることになっている王の意図に、最も良き忠告と助力を得て決議するため」であった。都市スターリングはこの知らせを「エディンバラの委員からの伝令」として受け取っていた *Stirling Extract*, p.180。

5月29日にエディンバラへの代表派遣を決めたのは、バーンタイランド市参事会と教区ダイサートであった。バーンタイランド市参事会は、ベイリ、ジョージ・ガーディンら2名の派遣を決定した。「祈禱書やカノン書、宗教の新機軸に対する請願や不満への王、枢密院、その他国王代理の答えを受け取るため、最近署名誓約された契約に従って (下線筆者)、新たな申し立てをするため、貴族、バロン、都市、牧師と話し合うため」であったB9/12/7/29。ここに新たに、契約を踏まえて行動することが示されている。ダイサートセッション記録は、短く「セッションは主任牧師が代表として海を渡っていくことを命じた」とあるCH2/390/1/167。ダイサートから海を渡っていく先は、首都エディンバラであった。

パース市参事会は、5月25日に続けて31日にも9名もの代表を選出しエディンバラに派遣することを決定している。目的は前回と共通するが、バーンタイランドのケースと同様、「最近署名誓約された契約に従って (下線筆者)、新たな申し立てをするため」の語が挿入されているPerth and Kinross Council Archive, B59/16/2/134A-134。

集まった人々には明確な目的があった。ロンドン宮廷につかえてきたスコットランド貴族ハミルトン侯が、国王代理としてスコットランドに到来するのを迎えるためであった。国王が国王代理としてハミルトンを派遣するという情報を、5月上旬に契約派が知ったとき、彼らは個別で勝手な応答をせずあくまで自由な教会総会と議会開催を求めると決めておいた。さて、スターリング市参事会記録が言うように、6月6日にハミルトンはエディンバラ郊外のダルキースで、契約派を逮捕するという国王の意図を枢密院の布告として出そうとしていたが、主教のいない枢密院はすでに契約支持の立場となっていて、これができなかった。その後もハミルトンは、国王の意思を何とか執行しようと主要な貴族と交渉を進めるが、契約派は数で圧倒し、弾圧が不可能であることを国王代理に理解させた *Revolution*, p.96。各地から代表が参集したねらいの一つがここにあったと考えられる。

バーンタイランド市参事会による武器への言及

ロンドンからエディンバラにハミルトンは陸路で到来した。しかし、海路では武器弾薬を積んだ一隻の船がエ

ディンバラ城のためと称してリース（エディンバラの外港）に到着していた *Revolution*, p.94。軍事的緊張が次第に高まりつつあったのは事実である。バーンタイランド市参事会の最初の武器への言及は、1638年5月29日である。地区隊長は武器の保管状況を点検し次回の参事会で報告せよ、会計係は火薬と弾丸を備えておくように、各自が自費で都市のために軍役につかねばならないかもしれない、と述べている B9/12/7/29A。

4 むすびにかえて

以上、祈禱書反対運動の開始から国民契約を巡る一連の動きと国王代理ハミルトン到来までの推移を、中央での展開を踏まえながら、今回対象とした地域の動きを手稿史料からたどってきた。これによって祈禱書反対と国民契約の運動としての広がりや、史料的な根拠をもって論じることができた。1637年10月時点で、祈禱書に反対する人々の連絡網が形成されており、市参事会や教区教会、プレスビテリから代表を選出し同時にエディンバラに参集することにより、数の力で祈禱書の強制を阻止し反対運動のリーダーへの弾圧を阻んだ。運動はできる限り暴力を排除しながら組織的に進められていたといえる。請願運動に代表を送り込む教会や参事会の側については、10月18日時点でそれを公式記録に載せないで動いていたパース、モントローズ、バーンタイランドも11月13日の参集を記録している。時間の経過に従って請願派は自信を深め、国民契約の成立によって主導権を握った。これによって社会的に地位がある人々は可否の表明を迫られ、契約を拒否すれば運動が盛んな地域では孤立を余儀なくされた。カーコーディプレスビテリでも、契約成立が大きな転回点となった。請願運動の参加者を投票で新議長につけ、前年に焚書と指定された書物の著者を主教の介在なしに叙任し、さらに契約を拒否する牧師を脇に置きそうした牧師の教区でも契約の誓約を実現させた。このように大きな政治的動きの場合、民衆的な支持の有無が研究史上論議の的となってきた。それを知るのは困難である場合が多い。しかしバーンタイランドの場合は偶然にも、牧師が契約を拒否したので、逆にこの牧師を拒否し契約に賛同するバーンタイランドの教区民の姿が、契約支持の書記の手を通して記録に活写され、私たちの知るところとなったのである。

註

- (1) Laura A. M. Stewart, *Urban Politics and the British Civil Wars: Edinburgh 1617-53*, [以下 *Urban Politics* と略] Brill, Leiden and Boston, 2006. なお本稿では、印刷文献の場合、初出の際註において書誌情報を明らかにし、二回目以降は省略した書名とともに参照ページを文中にて示す。
- (2) これらの手稿史料の出典は、National Archive of Scotland 以外に所蔵されている場合は、所蔵文書館名と史料番号を文中に示す。したがって、史料番号のみの表記はその文献が National Archive of Scotland に存在することを示す。
- (3) David Masson, ed., *The Register of the Privy Council of Scotland*, 2nd series (1625-60), 8 vols, 1899-1908, Vol. 6 [以下 *RPCS*, 2-6 と略], pp.352-353.
- (4) Allan I. Macinnes, *Charles I and the Making of the Covenanting Movement, 1625- 1641*, [以下 *Charles I* と略] John Donald Publishers: Edinburgh, 1991, p.158.
- (5) David Stevenson, *The Scottish Revolution, 1637-44, The Triumph of the Covenanters*, [以下 *Revolution* と略] David & Charles, Newton Abbot, 1973, pp.60-61.
- (6) John McCafferty, "The Churches and Peoples of the Three Kingdoms, 1603-1641", p. 77, in Jenny Wormald, ed., *The Seventeenth Century: Short Oxford History of The British Isles*, Oxford University Press, Oxford, 2008, pp.51-80.
- (7) D. H. Fleming, "Scotland's Supplication and Complaint against the Book of Common Prayer (Otherwise Laud's Liturgy), The Book of Canons, and the Prelates, 18 October 1637", [以下 *Supplication* と略] in *Proceedings of the Society of the Antiquaries of Scotland*, Vol.60 (1925-26) pp.314-83, Edinburgh, 1927, pp.360-363.
- (8) 見開きの手稿史料のページで右側のページのみページ番号がある場合、ページ番号がふつてあるページの左側のページを示す時には、そのページ数に A をつけた。すなわち、B59/16/2/131-132A の 132A とは、132 ページの左側のページという意味である。
- (9) Hew Scott, ed., *Fasti Ecclesiae Scoticanæ: The Succession of Ministers in the Parish Churches of Scotland from the Reformation, A.D. to the Present Time*, [以下 *Fasti* と略] William Paterson, Edinburgh, John Russell Smith, London, Vol.2, Part 2, pp.609,650.
- (10) D. Laing, ed., *Letters and Journals of Robert Baillie, 1637-62*, 3vols, [以下 *Letters* と略] Bannatyne Club, Edinburgh, 1841-42, Vol.1, pp.148,151-152.
- (11) D. H. Fleming, "The National Petition to the Scottish Privy Council, October 18, 1637", [以下 *Petition* と略] p.247, in *The Scottish Historical Review*, Vol.22, No.88, 1925, pp.241-248.
- (12) *Extracts from the Records of the Royal Burgh of Stirling A.D.1295-1666, With Appendix, A.D. 1295-1666*, [以下 *Stirling Extracts* と略] The Glasgow Stirling shire and Sons of the Rock Society, Glasgow, 1887, pp.177-178.
- (13) David Beveridge, ed., *Culross and Tulliallan or Perthshire on Forth its History and Antiquities with Elucidations of Scottish Life and Character from the Burgh and Kirk-Session Records of that District*, 2vols., [以下 *Culross and Tulliallan* と略], William Blackwood and Sons, Edinburgh and London, 1885, Vol.1, pp.171,173.

(14) Walter Makey, *The Church of the Covenant, 1637-1651: Revolution and Social Change in Scotland*, John Donald Publishers: Edinburgh, 1979, p.24.

(15) <http://www.oxforddnb.com/view/article/10735>

(16) Marguerite Wood, ed., *Extracts from the Records of the Burgh of Edinburgh 1626 to 1641*, Scottish Burgh Records Society, Oliver & Boyd, Edinburgh, 1936, p.199.